

臺

山櫻

蘭溪

臺

東 京 日 新 聞 原 稿 用 紙

昔時よからの御門 大学東校といふ醫學校  
 ありあつた後にも 久しくその面影を残してある  
 下の纏帯も ころもあつた極細の黒門構へで  
 内科 十段料診察所と楷書で認められた 表看牌を  
 掲げてある漢方醫の住宅がある。主人 大津田善順  
 と言つて 六十近い星くし氣な老人。今もよく時  
 勢を度し 無病の所習は 成呆れたか、これでも代々  
 藤堂家の御殿醫 筋目の賤しからぬ家柄なのであ  
 る。須大西南の室は 妙雲の漲り流れた 明治十年  
 の春 丁酉梅と櫻が咲き代る 好時節。  
 青海波の襷を鎖めた 手圍は 式量つき三疊敷  
 々々 草根本皮の何やらを薬研びびち  
 と刻つてあるのや、主人の鋸る當る 唐澤信四郎  
 とつと 二十四五の急密生で 色を生白い 眼の奥  
 つた 厭味の多い人物。  
 暫らく待たせられ 十僧と老婆と二人ばかり

(二)

の薬劑取が 漸く今迄去つた 武學大おれ 静閑し  
 て 炎陽が胡蝶の舞をやうに 狂つてある。薬研の  
 音が眠る













